多文化まちづくり工房

多様な文化背景を持った人たちが、それぞれの個性を出し合い、ともに楽しく暮らせる「まち」をつくることを目的とした団体です。
生まれた場所や使える言葉は人それぞれ。だからこそ、同じ時間、同じ空間を生きる仲間としてともに生きる「まち」をつくりたいと思っています。

ことばとコミュニケーション

「ことば」は人と人がつながるための道具の一つです。外国人が日本での生活の基盤となる日本語を身につけること、日本人が地域で暮らす人達の言語を学ぶこと、言葉だけではないコミュニケーションの能力をみんなが身につけることが大切です。また、教室は様々な人のつながりを生み出す、出会いの場でもあるのです。

➢　**夜の日本語教室　水・土　19:00～20:40（いちょうコミュニティハウス）**

多文化まちづくり工房の活動の原点はこの教室。学習者は中国やベトナム、カンボジアなどアジアを中心とした地域の出身者がほとんどで、来日直後の人から上級者まで、毎回20～30人程度が参加しています。高校生や大学生、社会人、主婦、地域の中で育った外国籍の若者など多様なサポーターが関わっている、にぎやかなクラスです。

➢　**朝の日本語教室　火･金　10:00～12:00（旧いちょう小学校B棟空き教室）**

2009年からスタートした教室で、来日間もない人や小さな子供のいる人などが中心の教室で、サポーターも主婦やリタイアされた方が中心の落ち着いた教室です。
学習者は10～15名程度ですが、地域の様々なネットワークを活用し、生活に直結した日本語の学習、日本社会の学習を行える場です。

➢　**ベトナム語教室 土 18:00～19:00（いちょうコミュニティハウス）**

サポーターの中でベトナム語に興味のある人を対象に学習の場を設けています。相手の言語が少しでもわかるとお互いの距離感がグッと近づきます。

夜の日本語教室

朝の日本語教室

ベトナム語教室

こどもと育ち

こどもたちは日本語や教科学習、進路選択、親とのコミュニケーション不足など様々な課題を抱えています。と同時に、世界を変える大きな可能性も秘めいています。こどもたちに寄り添い、保護者とともに考える場づくりを行っています。

（「神奈川県社会福祉協議会・地域福祉（ともしび）推進助成金事業」）

➢　**プレスクール　土　10:00～12:00 秋開講予定（いちょうコミュニティハウス）**

小学校入学前のこどもを対象としたクラスです。ひらがなや物の名前などを学びながら、学校で勉強する準備を行なっています。また、保護者たちとの関係性を作りながら、日本の教育システムについての説明なども行なっています。

➢　**放課後学習教室　火・金　15:30～17:30（旧いちょう小学校B棟空き教室）**

飯田北いちょう小学校と協働で行っている放課後の学習教室です。対象は4・5・6年生。外国籍の子どもに限定しておらず、日本人の子供も参加しています。場所は旧いちょう小

学校の空き教室をお借りして、宿題を中心に、百ます計算やパズル、常識問題クイズなどを使い、「放課後の居場所」的な場づくりをしています。
一ヶ月に一回は泉図書館やおはなし泉の会の協力を得て、読み聞かせの時間を作ったり、寄贈いただいた本や漫画のコーナーを作ったりして、活字に触れる機会を増やしたいと考えています。

➢ **夏休み学習教室（飯田北いちょう小学校）　8月22日～24日**

いちょう小学校主催の夏休みの補習に、サポーターとしてボランティアに参加してもらっています。全校生徒が参加しているので、様々な学年の子供の様子をみることができる場にもなっています。

➢ **中高生学習教室　火・木　19:00～21:00（旧いちょう小学校B棟空き教室）**

学習面、精神面ともに非常に重要な時期の中学生を中心とした学習補習の場です。普段集まるのは10名前後の中高生ですが、テスト前や受験前には多くなったりもします。
学習のサポートはもちろん、子どもたちの様々な話を聞く、という場にもなっており、大学生など若い世代を中心に関わってもらっています。

➢ **高校進学ガイダンス　9月28日　（いちょうコミュニティハウス）**

外国籍の家庭では、進学に関する情報を持っていないケースが多く、中学生とその保護者に高校進学情報を知ってほしいとスタートさせた事業です。県内で活動する「ME-net」などと協力し、いちょう団地内で行っています。毎回多数の参加者があり、高校進学の情報を得ると同時に、受験勉強のスタートをきるきっかけにもなっています。

プレスクール

放課後学習教室

中高生学習補習

相談と情報発信

どんなに簡単に思えることでも、日本語が十分にわからない人にとってはとても難しいことです。地域で生活していくには、母語で気軽に相談できたり、母語で情報を受け取れたりすることが大切です。

（かながわ国際交流財団民際協力基金助成事業）

➢ **生活相談事業　月・水・金13：00～18：00（多文化まちづくり工房事務所）**

「何でも屋」といった方がいいような様々な相談に、地域で育った若者に通訳として関わってもらいながら対応しています。ベトナム語、中国語、カンボジア語などの通訳がおり、外国籍住民が安心して相談できる場づくりを行っています。現在では年間1500件前後の相談対応を行っています。

➢ **学校・地域への通訳派遣　随時**

学校や地域でも言語的な壁にぶつかることが多く、緊急で通訳の依頼が入ったり、個人面談や自治会の会議への通訳の派遣を行ったりしています。
ベトナム語やカンボジア語の通訳は確保が難しく、その確保を行うことは地域の中でも重要な役割となっています。

➢ **ベトナム語情報誌「NHIP CAU」・中国語情報誌「華語橋」・カンボジア語情報誌の発行**

日本語だけではなかなか届かない情報を多言語化し、各家庭に戸配することで、様々な生活情報を届けていこうという試みです。毎月1回、地域情報を中心に配布しています。

➢ **自治会等の団地掲示物多言語化　随時**

地域から外国籍の方にも知らせたい、という情報があるときなど、当団体で翻訳を行い、多言語化して配布・掲示などを行っています。また、連合自治会との協力により、団地内での放送を多言語化する事業も行っています。

相談事業

新規入居者説明会

団地放送の多言語化

スポーツと健康

お互いの言葉がわからなくても、一緒に体を動かせば仲良くなれることもあります。またスポーツを通して一人ひとりの精神的・肉体的健康を維持しつつ、それが地域の活性化につながっていったら、と思っています。

➢　多文化サッカー　日　14：00～18：00　（旧いちょう小学校グラウンド）

毎週日曜日に行っている、サッカーはすでに10年目になりました。ベトナムやカンボジア、ペルー出身の若者（もちろん日本人も）などが毎回20名程度集まる場で、居場所として重要な場となっています。今年度はチーム化を視野に盛り上げていく予定です。

➢　地域スポーツ大会への参加　年2回（いちょう小学校）

地域で行われているスポーツ大会に、チームを作って参加しています。バレーボール大会とソフトボール大会、若者が参加し盛り上げていくことで、地域の活力にもなっています。

➢　スノボー＆スキーツアー　不定期

最初は一面の雪を見せよう、ということで始めたツアーですが、今では外国籍の若者たちが計画してくれています。泊まりがけで一緒に過ごすとぐっと距離が近づきます。

多文化サッカー

ソフトボール大会

スキーツアー

風景と自然

いちょう団地を自分の「ふるさと」と思って、愛着を持ってもらうには、風景が必要だと思っています。いちょう団地ならではの風景、そして周辺を囲む自然をもっともっと楽しめるものにしていきたいと考えています。

➢　あいさつロードプロジェクト

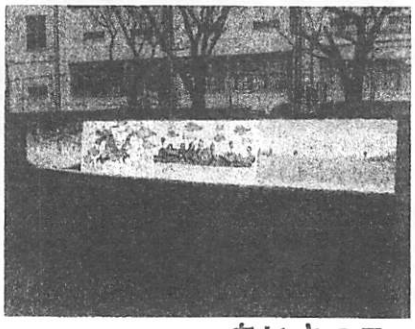
地域の多様性を視覚化してみようという取り組みです。2010年度は日本、中国、カンボジア、ベトナムを象徴する絵とそれぞれの国のあいさつを、2013年度にはいちょう小学校の最後の卒業生たちがブラジル、ラオスといちょう小学校の絵を描きました。

➢　せせらぎ緑道水辺愛護会

団地の横にあるせせらぎ緑道を、地域の人たちの憩いの場にしていこうと水辺愛護会を立ち上げました。この場を使って地域イベントも行っていきたいと思っています。

➢　多文化農園プロジェクト

団地周辺にはまだまだ緑が残っており、中には畑として利用可能な土地もあります。そういった場所を活かして、少量ながら様々な国の人が自分たちの食べたい食材を作れたら、と考えています。



あいさつロードプロジェクト

多文化農園プロジェクト

防災と防犯

地震や台風などが多い日本では、誰もが災害に不安を抱えていますが、多くの外国籍住民と高齢者が住む地域において、複数の言語を使える能力と若さが大きな力になると考えています。

➢　「TRYangels」

泉消防署と協働で立ち上げた「TRYangels」、地域の防災訓練やイベントでの心肺蘇生法＆AED 講習などを行っており、今後は災害時の地域防災拠点多言語対応化などにも関わっていきたいと考えています。

食と音楽

やはり食と音楽（踊り）はコミュケーションのきっかけとして欠かせません。地域の人も巻き込みつつ、みんなで楽しめる場を作りたいと思っています。

➢　いちょう団地祭りでの出店　10 月 4・5 日

いちょう団地最大のイベント、「団地祭り」。2000 年から出店していますが、今では多くの外国籍の人たちがそれぞれお店を出すようになりました。今年度は「いちょう丼 2014」を作って売ろうと考えています。

➢　多文化共生交流会の企画　10 月 5 日

団地祭り 2 日目に行われる多文化共生交流会。この企画運営を行なっています。限られた時間ですが、多くの人に楽しんでもらえるように企画したいと思います。

いちょう団地祭り

多文化共生交流会

防災訓練での TRYangels

活動参加者募集！

多文化まちづくり工房では日本語学習者のサポートをしてくれる方、小中学生の学習のサポートをしてくれる方、お祭りや文化講座などの企画を手伝ってくれる方などを募集しています。活動参加に資格や経験、言語などは必要ありません。小中学生の元気な声と笑顔に触れてみたい、外国籍の人たちと話してみたいなど動機は何でも結構です。気軽にご連絡ください。

多くの皆さんのご参加をお待ちしています！

Tel: 045-805-4323　tmkobo@gmail.com　http://www.tmkobo.com

080-3392-6466　tmkobo@softbank.ne.jp　（代表：早川秀樹）

多文化によるまちづくり
いちょう団地の事例から

多文化まちづくり工房
代表　早川秀樹

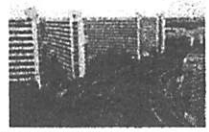
1　2014/11/26

場所

➢横浜市西端と大和市、周辺には藤沢市、綾瀬市等

2　2014/11/26

規模



➢横浜側48棟(高層5棟・中層43棟)2238戸・17.6ha
➢大和側31棟(高層2棟・中層29棟)1394戸・9.4ha

3　2014/11/26

特徴

- 外国籍の世帯比2 4%
- 中国帰国者、インドシナ難民をルーツにもつ人が多い(中国人、ベトナム人、カンボジア人、など)

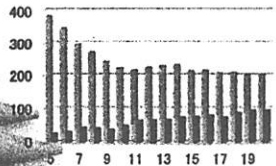
日本人住民の高齢化

これからの地域の担い手である若者世代は多文化につながる若者が中心

4　2014/11/26

若い世代の比率

いちょう小学校児童数推移



■全校児童数　■外国籍児童数

国籍	いちょう	鶴田北
ベトナム	67(5)	20(3)
中国	20(9)	7(5)
カンボジア	7(4)	4(2)
ラオス	4(2)	
ブラジル	3(1)	
フィリピン	1(4)	
インド	(1)	
バングラディシュ	(1)	
アメリカ		(5)
計	92(27)	31(16)
日本	49	117

5　2014/11/26

ことばとコミュニケーション

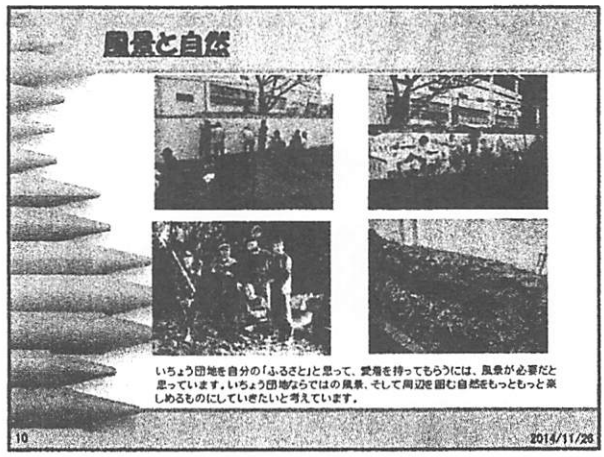
「ことば」は人と人がつながるための道具の一つです。外国人が日本での生活の基盤となる日本語を身につけること、日本人が地域で暮らす人達の言語を学ぶこと、言葉だけではないコミュニケーションの能力をみんなが身につけることが大切です。また、教室は様々な人のつながりを生み出す、出会いの場でもあるのです。

6　2014/11/26

こどもと育ち
こどもたちは日本語や教科学習、進路選択、親とのコミュニケーション不足など様々な課題を抱えています。と同時に、世界を変える大きな可能性も秘めています。こどもたちに寄り添い、保護者とともに考える場づくりを行っています。
7
2014/11/26

相談と情報発信
どんなに簡単に思えることでも、日本語が十分にわからない人にとってはとても難しいことです。地域で生活していくには、母語で気軽に相談できたり、母語で情報を受け取れたりすることが大切です。
8
2014/11/26

スポーツと健康
お互いの言葉がわからなくても、一緒に体を動かせば仲良くなれることもあります。またスポーツを通して一人ひとりの精神的・肉体的健康を維持しつつ、それが地域の活性化につながっていったら、と思っています。
9
2014/11/26


風景と自然
いちょう団地を自分の「ふるさと」と思って、愛着を持ってもらうには、風景が必要だと思っています。いちょう団地ならではの風景、そして周辺を囲む自然をもっともっと楽しめるものにしていきたいと考えています。
10
2014/11/26

防災と防犯
地震や台風などが多い日本では、誰もが災害に不安を抱えていますが、多くの外国籍住民と高齢者が住む地域において、複数の言語を使える能力と若さが大きな力になると考えています。
11
2014/11/26

食と音楽
やはり食と音楽（踊り）はコミュニケーションのきっかけとして欠かせません。地域の人も巻き込みつつ、みんなで楽しめる場を作りたいと思っています。
12
2014/11/26

地域内での様々な連携

- 自治会
  - 団地祭り・多文化共生交流会・防災訓練などの行事への参画
  - 団地放送などの多言語化
  - 代議員会などの言語サポート
- 学校
  - 小学校放課後補習、夏休み補習、中学校国際教室サポート
  - 通訳手配
  - こどもたちや地域についての情報交換
- 行政機関
  - 区役所の養成講座を通して、人材育成・人材活用
  - 消防署との災害マニュアル作成やTRYangels立ち上げ
  - 警察署との防犯講座や防災講座
  - 図書館の読み聞かせ

13 2014/11/26

今後の活動の展開

- いちょう小学校跡地利用
  - 活動の拡充
  - いちょう文化スポーツクラブとの連携
  - 高齢者たちの活動への展開
- 飯田北いちょう小学校との連携
  - 放課後補習の継続
  - 土曜日や長期休暇の有効活用
  - 登校時の見守り活動
- 団地周辺地域への活動展開
  - 周辺緑地や空地を活かした取り組み
  - 区域の取り組み・広がる集住地域へのアプローチ

14 2014/11/26

地域や学校で活動する際の工夫・配慮

- 一見無駄に見えることこそ
  - 信頼関係の構築
  - 思わぬ人とのつながりができる
- 活動を多角的に
  - 一つの活動で出来たつながりが他の活動に生きる
  - アイディアがあれば、波をのがさない
- 視野を幅広く
  - 一つのアプローチがダメな時は別のところへ行けばいい

15 2014/11/26

あしたの日本へ:

多文化まちづくり工房代表

早川秀樹氏

はやかわ・ひでき　1974年神奈川県生まれ。98年神奈川大卒。在学中の94年から横浜市泉区で学生仲間と中国残留孤児帰国者を対象にボランティアで日本語教室を始める。その後、神奈川県大和市にベトナムやカンボジアなどのインドシナ難民の定住促進センターがあったこともあり、外国籍住民が集住するいちょう団地での活動を広げ2000年に「多文化まちづくり工房」を設立した。10年外国人地域防災リーダーTRYangelsの取り組みなどが評価され、国際交流基金地球市民賞を受賞。

◇日本の将来の縮図を見せる外国人との共生地域

今年は日本とベトナムの国交樹立40年。日本に移り住むベトナム人は急増し、昨年末現在の在留者は前年比17．９％増の５万２３８５人（外務省調べ）と、ブラジル人に次ぐ５番目の多さ。ベトナム人を含む外国人世帯が多い横浜市泉区と神奈川県大和市にまたがるいちょう団地で約20年間、日本語教室や生活相談など支援活動を続ける「多文化まちづくり工房」の早川秀樹代表に、国際化が進む地域での取り組みや抱える問題などを聞いた。（聞き手　本誌・宗岡秀樹）

――最近は活動の幅を広げていますね。

早川氏　もともとは残留孤児など中国からの帰国者やボートピープルとして日本に来たベトナム、カンボジアの子供たちを対象に日本語教室をやっていました。続けていくうちに付き合いも深くなって活動も広がり、今は日本語教室を軸に小中学生の学習の補習、生活相談、地域の祭りへの参加・企画、防災訓練や地域の外国籍の子供たちとサッカーなどもやっています。夜の日本語教室は１回当たり学習者が30人くらいで、年間１００回近くやっています。朝の日本語教室は区役所の日本語ボランティア養成講座修了者にボランティアとして加わってもらい、主婦たちを中心にアットホームな場作りをしています。

生活相談もとても大事だと思っています。区役所や学校からのお知らせや、保育園や県営住宅の申込書類の書き方、離婚相談などさまざまです。昨年までは神奈川県との協働事業として主に入居相談を、今年からはかながわ国際交流財団の民際協力基金を受けて生活相談を続けています。

――相談はどこの国籍の人が多いのですか。

早川氏　ベトナムの方が多いです。ベトナムの通訳が常駐をしているところはあまりありません。うちには、父親がボートピープルで日本に来て、小学校５年の時に呼び寄せられてこの団地で育ったベトナム語の通訳ができる女性が常駐しています。その人を頼って1日当たり十数人がそれぞれ数件の相談を持ってきます。生活の場から近いこの場所でサポートができているのは大きいと思います。

――生活相談で最近の傾向は？

早川氏　以前は団地に入りたいというのが多かったのですが、最近はもう少し広い周辺の団地に移りたいという流れが出てきています。子供が大きくなると３畳、４畳半、６畳とキッチンというこの団地の間取りでは手狭になるからです。家賃は県営なので安いのですが、中には滞納が続いて立ち退き勧告を受けるというケースもあります。外国人はアルバイトが多く、収入はある程度あっても正規雇用ではないので、不安定になりがちでいきなり首を切られることもあるのが現状です。

――ベトナムの人たちはどんな形で日本に来るのですか。

早川氏　80～90年代はボートピープルで来た1世世代がいて、家族を呼び寄せたりして入国と集住が進んできました。その子供たちが大きくなり、結婚する時には母国の人を連れてくることが多く、今でも新規の入国者が増え続けています。結婚は基本的にはベトナム人同士で、親戚や親、友人からの紹介で知り合うケースが多いようです。

――日本は少子高齢化が進みこれからは労働力を外国人に頼らざるを得ないという状況の中で、この地域は将来の日本の縮図では？

早川氏　そうですね。ここの外国籍の人の中にも出て行く流れはありますが、空いたところにまた新たに外国籍の人が入ることも多く、外国籍の世帯数は減ってはいません。ここがある意味、日本定住のための第１次受け入れセンターのような存在になり、日本語を身につけ仕事が見つかり生活が安定してきたら他の地域へ出て行くという状況です。外国籍の人の住む世界がここを起点にどんどん広がっていけば、10年後にはここに近い状態になるところが周辺地域にも多くなるかもしれません。この団地では、日本人は高齢者が圧倒的に多く、外国籍の人は若い世代で、少子高齢化という意味でも一番先端をいっているのかもしれません。このまま少子高齢化が進めば、徐々に活気も失われかねない状況でもあります。

――防災活動にも力を入れていますね。

早川氏　06年に横浜市の泉消防署に行った際に、担当者が積極的な人で、防災マニュアルを多言語化したいという話で意気投合し、一緒に英語、スペイン語、ベトナム語、カンボジア語、中国語と日本語６言語で作りました。興味を持ってもらうために、できるだけ文章を短く、基本的なことを簡単な言葉と絵だけで説明したものです。翌年にはＡＥＤの使い方など応急手当て資料も作りました。

　防災組織は、防災を切り口に活躍できるようなチーム作りをしたいという若者たちの提案に消防署の人が乗ってくださり、消防署の普通救命講習を受けたり、みんなで災害時資機材取扱訓練を受講したりして外国人防災リーダーを立ち上げました。その後、新しく人材を集めようと「ＴＲＹ（多文化、レスキュー、ユース）angels」という名前をつけて活動を広げ、今では地域の防災訓練やお祭りなどにも参加しています。外国人の若者たちを巻き込んだ防災組織は全国的にも珍しいのではないかと思います。

また、非常時には音声で伝えることも大事です。この団地の屋上にあるスピーカーを活用して少しずつ多言語での発信も行おうと考えています。それが特に必要だと感じたのは、東日本大震災後の計画停電の時です。日本人も十分に情報を得られない中で外国籍の人たちは全く分からない。停電が何時に起きるかわからないと買い物に行くのも不安という状況になり、自治会の人と話してベトナム語、中国語、カンボジア語の３言語でしばらくの間、毎朝、停電の時間などの注意を流したのです。
――外国人だけでなく、お年寄りが多い地域などはそれが必要ですね。

早川氏　案外、外国人のために行ったことが高齢者にとっても必要なケースは多いと思います。防災訓練で言語ごとに集まって応急処置の講習などをしていると、最初は尻込みしていた高齢者が、そのうち興味を持ちはじめ、「私も一緒に習いたいわ」といって加わってきました。そして防災訓練の後、「最初は外国人と話をするのも怖いから話しかけないようにしていたのだけども、すごく優しいお兄ちゃんだわね」となったのです。そこに信頼関係のつながりが生まれたのです。防災の技術や知識だけではなく、その過程で生まれてくるつながりもすごく大事だと思います。
――行政への要望は。

早川氏　一つは団体と行政とが別々に動くのではなく、手を組みながらいろいろな取り組みができるようにしてほしいということです。この地域ではそういった関係が様々な形で作られつつありますが、他の地域ではまだ難しいという話を聞くことも多いです。また、教育の面では、外国籍の人がどんどん流入し、外国籍の子供たちが増えている中で、日本語指導や多文化教育についてある程度知識がある、外国籍の子供の受け入れを専門に行える力を持った先生がもっと養成され、公的に配置されればと思います。外国から来る子供たちを受け入れ、能力を高めてしっかりと成長させて送り出していくことがこれからの日本社会のためにも、大事なことなのではないかと思っています。